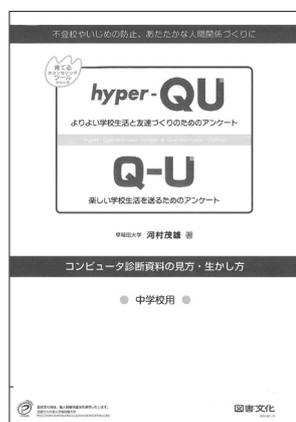


『Q-U』と『hyper-QU』の紹介

教材活用シリーズ 第94回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果が得られるポイント(場面・方法)などをご紹介します。

一般財団法人 応用教育研究所
『Q-U』・『hyper-QU』



ほりぐち てつお
堀口 哲男
(一般財団法人 応用教育研究所)

はじめに

Q-U (QUESTIONNAIRE - UTILITIES) は、児童生徒の心理的な側面を、質問紙法を用いて調査し、その結果から児童生徒理解を深めるものです。早稲田大学・河村茂雄教授により作成されたもので、現在、小学校から高校まで広く利用されています。また、関連する書籍も数多く、入門書から解説書、さらには実践事例集まで、数多くの書籍が公刊されています。

I. Q-U hyper-QU の基本的理解

Q-U は、学級満足度尺度と学校生活意欲尺

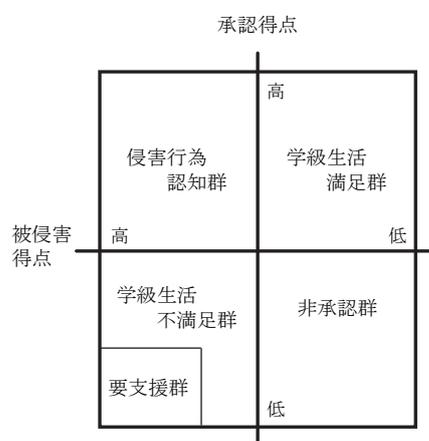
度から構成されています。また、hyper-QU は、これら2つの尺度に、ソーシャルスキル尺度が加わっています。

1 学級満足度尺度

学級集団が児童生徒にとっていごちのよい場所になれば、学級集団への適応感が高まるだけでなく、諸々の活動に主体的に取り組む意欲につながります。児童生徒が所属する学級集団をいごちがよいと感じるのは、

- ① トラブルやいじめなどの不安がなくリラックスできている
- ② 自分が級友から受け入れられ、考え方や感情が大切にされていると感じられる

という2つが満たされたときです。①の視点を得点化したものが「被侵害得点」、②を得点化したものが「承認得点」です。これを座標軸にし、児童生徒を次の4つのタイプに分けて理解します。



▲ (図1) 学級満足度尺度のまとめ

A 学級生活満足群：承認得点が高く、被侵害得点が低い児童生徒。学級内に自分の居場所をもち、学級生活を意欲的に送っていると考えられます。

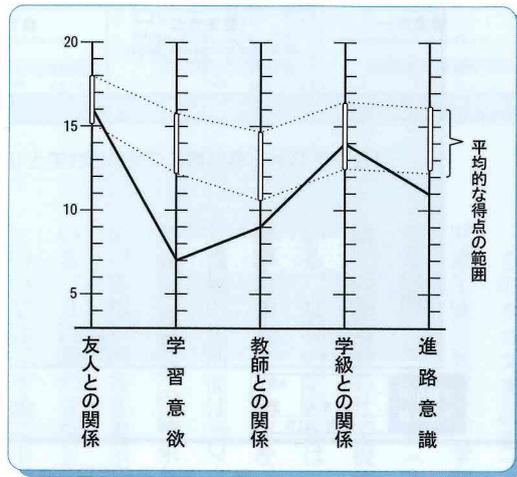
B 非承認群：承認得点と被侵害得点ともに低い児童生徒。不適応感やいじめや侵害行為を受けている可能性は低いが、学級内で認められることが少なく、自主的に活動する気持ちは弱い。

C 侵害行為認知群：承認得点と被侵害得点ともに高い児童生徒。学級生活や諸々の活動に意欲的に取り組むが、そのプロセスでトラブルが生じてしまうことが多い。また、物事に対して、過敏な反応を示す児童生徒の可能性もあります。

D 学級生活不満足群：承認得点が低く、被侵害得点が高い児童生徒。いじめ被害や悪ふざけ

児童生徒が、先に説明した学級満足度尺度において、どの群に属しているかや、意欲尺度の結果を重ね合わせて、子ども達がどんな気持ちで学校生活を送っているのかを把握し具体的な対応を考えることができます。

▼（図2）学校生活意欲尺度の結果



を受けている可能性が高い。学級集団への適応感は低く、不登校に至る可能性もあると考えられます。なかでも、要支援群の児童生徒には早急な対応が必要です。

2 学校生活意欲尺度
この尺度は、児童生徒の学校生活における意欲や充実感を測定するものです。測定する領域は、中学・高校用が、「友人」「学習」「学級」「教師」「進路」の5つです。小学校用は、「友人」「学習」「学級」の3つの領域で構成されています。図2は、中学校の例を示したものです。

II. 学級集団の理解

1 共通言語としてのQ-U

学級集団にはさまざまな状態が存在し、また、時間とともに変化していきます。子どもと教師との関係、児童生徒間の相互作用、インフォーマルな小集団の動き、これらが変わることにより、集団の雰囲気は大きく変わります。

このような学級集団の見取りは、主に先生の観察によって行われてきました。しかし、その視点はそれぞれの先生によって異なり、同じ学級集団をみても、「活気のないクラス」とみる先生もいれば、「落ち着きのあるクラス」と捉える先生もいます。

Q-Uは、学級内の児童生徒全員の結果を座標にまとめることで、現在の学級集団がどのような状態にあるのかを示唆します。Q-Uの結果を参考にして、先生方の見取りの方向を一致させることにより、統一感のある取り組みを行うことが可能となります。たとえるならば、Q-Uが学級集団見取りの「共通言語」として機能することになります。

2 Q-Uの結果と学級集団のタイプ

Q-Uが想定している学級集団のタイプには、いくつかの典型があります。図3は、その代表的なものを示したものです。

学級がスタートして一定期間が過ぎた段階（学級の方向性がある程度みえた段階）で、Q-Uを実施し、先生の観察とQ-Uの結果を重ね合わせていきます。そして、現在の学級の状態を

	右上に集まった分布の学級（親和的な学級） 全体的に承認得点が高くなっており、学級内にルールが確立している状態と考えられます。児童生徒同士が互いの存在を認め合う親和的な人間関係が築かれ、主体的に活動することのできる学級といえます。
	縦に伸びた分布の学級 児童生徒間で承認得点の差が大きくなっています。学級内のルールは確立しており、一見、静かで落ち着いた学級に見えますが、児童生徒の意欲に大きな差が見られ、人間関係も希薄な状態が考えられます。
	横に伸びた分布の学級 承認得点は全体的に高いのですが、児童生徒たち間で被害得点の差が大きくなっています。いじめ被害を受けている児童生徒が存在している可能性があります。学級内におけるルールが明確になっておらず、ルールの定着が低い状態が考えられます。
	斜めに伸びた分布の学級 学級生活満足群から学級生活不満足群にかけて階層化している状態です。学級内でのルールの定着が低く、人間関係も希薄な状態と考えられます。孤立した児童生徒が学級不満足群にいる場合、不登校になる可能性がありますので、早急な対応が必要でしょう。
	左下に集まった分布の学級 児童生徒の多くが学級生活不満足群にいる状態です。学級がすでに教育的環境になっておらず、授業が成立しないことが多く、陰湿ないじめが発生しやすく、学級集団を単位とした教育活動が成り立たない状態が考えられます。

▲（図3）学級集団の分布状況における特徴

把握して、対応策を考えることとなります。年度当初から、右上に集まった集団（親和的な学級集団）からスタートできれば、先生方も、さまざまな活動に取り組めることでしょう。しかし、そういう学級はそれほど多くありません。縦や横に伸びた学級、斜めに伸びた学級、もしくはすると崩壊寸前のマイナスからのスタートということもあります。

それぞれの型に応じた効果的な対応の先行事例も書籍や研究報告で紹介されているので、こういった事例を参考に自身の学級の対応を考えることができます。これらは、困っている先生方への道しるべになることと思います。また、若い先生方にベテランの先生がアドバイスする際にも、Q-Uの結果は有効だと考えられます。